

オリパラ基本推進調査

(中央アジア諸国を相手国としたホストタウンの横連携)

成果報告書

株式会社エヌ・ティ・ティ・データ経営研究所

令和 2 年 3 月

第1章. 調査の概要	2
1. 調査の背景・目的	2
2. 実施内容	3
第2章. 調査対象プロジェクトの実施結果	4
1. 調査対象プロジェクトの概要	4
2. 各自治体の調査対象プロジェクト	6
(1) 青森県青森市	6
(2) 山梨県山梨市	12
(3) 愛知県名古屋市	17
(4) 奈良県橿原市	23
3. 中央アジア諸国を相手国としたホストタウンの横連携事業の成果報告	28
(1) 実施概要	28
(2) アンケート結果	29
第3章. 成果のとりまとめ	43
1. ホストタウン内への波及効果	46
(1) 事業の成果概要	46
(2) 各調査対象プロジェクトの実施結果に対する評価と今後の課題	47
2. 事業実施により達成できた目標	49
(1) 事業の成果概要	49
(2) 各調査対象プロジェクトの実施結果に対する評価と今後の課題	50
3. 相手国への波及効果	52
(1) 事業の成果概要	52
(2) 各調査対象プロジェクトの実施結果に対する評価と今後の課題	53
4. 2020年東京大会を契機としたレガシー創造への寄与	54
(1) 事業の成果概要	54
(2) 各調査対象プロジェクトの実施結果に対する評価と今後の課題	54
第4章. 他ホストタウンへの普及・展開に向けた提案	55
1. 取組内容のモデル化	55
2. 事業実施経費	57
3. 事業実施体制・フロー	59

第1章. 調査の概要

1. 調査の背景・目的

第32回オリンピック競技大会（2020／東京）、東京2020パラリンピック競技大会（以下、「東京2020大会」という。）の開催により、多くの選手や観客等が来訪する機会を国全体で最大限生かし、日本の自治体がホストタウンとして、東京2020大会に参加する国・地域の選手や住民等と、スポーツ、文化、経済などの多様な分野において交流し、グローバル化の推進、地域の活性化等に活かす取組みを全国に広げている。

ホストタウンは、スポーツの振興、教育、文化、経済の向上及び共生社会の実現など様々な分野でレガシー創出につなげることが目的であるが、オリパラ基本方針に記載のあるような、復興五輪、食文化の発信、子供たちの国際感覚の向上、ユニバーサルデザインの推進など、特に重点を置いて取り組む分野が存在する。

2020年3月末時点において、ホストタウンの登録数は423件あり、ホストタウンとなっている自治体数は492となっており、大会に向けて、多くのホストタウンが具体的な取組を開始している。

本調査では、同一地域に所在する国を相手国とするホストタウンを対象に、それぞれのホストタウンが「文化」という共通のテーマをもちながら、相手国とともに当該テーマについて、市民同士の草の根交流を通じて学び、考え、行動することで、自治体の住民が地域の課題について主体的な意識を持つことを促すとともに、国を超えたテーマの共有や相手国の市民との活動を通じて交流の範囲を広げることを狙いとする。

以上の調査事業の狙いを受けた効果や、実証による成功の要因、他地域への普及・展開に向けた課題等を分析し、他ホストタウンへの横展開の可能性について調査することを目的とする。

なお、中央アジア地域は、シルクロードの出発地点であり、我が国文化・経済等への影響を大きく与えた地域であるなど地政学上、我が国にとって重要な地域であり、東京2020大会を契機に交流が活性化することが望まれることから、本調査の対象地域とするものである。

2. 実施内容

本調査は、ホストタウン事業を推進するため、内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局（以下「主管事務局」という。）と連携しながら、東京 2020 大会の成功に向けて、その取組が他のホストタウンに比べ突出していると認められ、他のホストタウンと課題やノウハウの共有等を行うことが今後のホストタウン推進に役立つと思われる取組（以下、「調査対象プロジェクト」という。）を行うホストタウン（以下、「フィールド自治体」という。）に対する調査を実施する。具体的な実施内容は、以下の通りである。

調査実施内容

#	調査実施項目	調査実施内容
1	フィールド自治体の選定	主管事務局との協議、及びホストタウンの登録自治体との調整を行い、主管事務局がフィールド自治体を決定する。
2	調査対象プロジェクトの検討	フィールド自治体と協議を行い、フィールド自治体の意向・ニーズを踏まえて、実施する調査対象プロジェクトの検討を行う。
3	調査対象プロジェクトに係る経費	フィールド自治体と協議を行い、事業計画書を作成する。また、調査対象プロジェクトの実施に係る経費の会計処理、及び事業全体の予算管理を行う。
4	中央アジア諸国を相手国としたホストタウンの横連携事業の成果報告	成果の取り纏めの一環として、フィールド自治体の交流実績に関する資料と記録映像を作成して、国内外の中央アジア諸国の関係者に対しメールにてアンケートを実施することで、事業の効果や課題を取り纏める。
5	成果のとりまとめ	事業実施の取り纏め、成果の分析、他ホストタウンへの普及・展開における課題等の取り纏めを行う。 成果の分析については、以下の視点から分析する。 <ul style="list-style-type: none">・ホストタウン内への波及効果・事業実施により達成できた目標・相手国への波及効果・東京 2020 大会を契機としたレガシー創造への寄与 普及・展開方策については、以下の視点から分析する。 <ul style="list-style-type: none">・事業内容のモデル化・事業実施体制・フロー・経費

第2章. 調査対象プロジェクトの実施結果

1. 調査対象プロジェクトの概要

主管事務局及びフィールド自治体との協議を経て、決定した4のフィールド自治体、及びそれぞれの調査対象プロジェクト概要は以下の通りである。

調査対象プロジェクト実施自治体

No.	自治体名 (ホストタウン事業 名)	調査対象プロジェクト概要
(1)	青森県青森市	<ul style="list-style-type: none">・ねぶた師による青森ねぶた祭紹介、跳人体験、ワークショップ（ねぶたの技法を用いた照明製作）の実施・青森市とタジキスタンの食材を使ったおむすびレシピ考案による食文化交流を実施・青森市の大学生とタジキスタンの大学生による手紙交換を実施
(2)	山梨県山梨市	<ul style="list-style-type: none">・キルギスのパラパワーリフティング競技の東京2020大会事前合宿を誘致する為、キルギスへ渡航して、パラリンピック委員会やパワーリフティング連盟とMOUを締結。キルギスの選手を山梨市に招聘し、山梨市民とのスポーツ・文化交流を実施・キルギス渡航時には、地元の食材とキルギスの食材の融合を目的として、縁を結ぶ「縁結びプロジェクト」を実施・山梨市内の小学生とキルギス小学生の手紙交換事業も実施
(3)	愛知県名古屋市	<ul style="list-style-type: none">・ホストタウンである名古屋市の認知度向上を目的に、ウズベキスタンの首都タシケントに於いて、現地のオリンピック委員会、パラリンピック委員会の関係者及びタシケント市民を招待した交流イベント「Tashkent meets Nagoya」を開催。イベントでは、名古屋の文化・食の発信、パラリンピック競技ボッチャの体験会等も実施・名古屋市とウズベキスタンの食材を取り入れたおむすびレシピ制作事業の実施・名古屋市とタシケント市の学生によるお手紙交換事業の実施

No.	自治体名 (ホストタウン事業 名)	調査対象プロジェクト概要
(4)	奈良県橿原市	<ul style="list-style-type: none"> ・橿原市とカザフスタンのデザイナーによる、東京 2020 大会に於けるカザフスタン選手団公式ユニフォームのロゴデザイン協働制作に関して、カザフスタンオリンピック委員会と覚書締結及び、パラリンピック委員会と事前合宿に関する覚書締結 ・橿原市と、カザフスタンの地場産物や食材を使ったおむすびレシピ制作事業の実施 ・橿原市内の小学生とカザフスタン小学生とのお手紙交換事業の実施

「2. 各自治体の調査対象プロジェクト」において、4 の調査対象プロジェクトの実施結果を記載する。なお、実施結果の記載にあたっては以下の項目についてそれぞれ記載する。

① 背景 :

プロジェクト実施に至った背景やこれまでの活動実績について記載する。

② 事業内容 :

実施した調査対象プロジェクトの内容について記載する。

③ 事業の効果 :

事業実施により得られた効果について、相手国との交流における効果、ホストタウン内部における効果についてそれぞれ記載する。

④ 課題 :

今後、プロジェクトを実施するにあたっての課題について記載する。

次頁より、4 のフィールド自治体について報告する。

2. 各自治体の調査対象プロジェクト

(1) 青森県青森市

① 背景

2018年10月5日に行なった東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会事前合宿等の実施に関する覚書の締結を契機に、青森市での青森市・タジキスタンの交流がスタートしており、今後の双方による交流拡大と深化及び持続可能な交流手法の検討のため本プロジェクトに参加し、タジキスタン現地での文化交流を実施することとした。

② 事業内容

《ねぶた師による青森ねぶた祭紹介、跳人体験、ワークショップ（ねぶたの技法を用いた照明製作）》

青森市で初となるタジキスタンでの文化交流を行うにあたり、タジキスタンの市民に青森市に対する興味、関心を高めていただきたいという狙いで、今回手紙交換も行ったロシア - タジク - スラブ大学において、映像等を用いた青森ねぶた祭の紹介や、参加者が「直に」体験できる跳人体験、ワークショップ（ねぶたの技法を用いた照明製作）を実施した。

《青森市とタジキスタンの食材を使ったおむすびレシピ考案による食文化の交流》

青森市とタジキスタンの食材を使ったおむすびの試作をタジキスタンと青森市の両地で実施した。先ず、タジキスタンにおいては、青森市及びタジキスタンの共通食材「りんご」をメインとした「りんごとチキンのおむすび」のほか、青森市の特産品「ホタテ」をメインとした「よもぎとホタテのおむすび」を試作。続いて、青森市においては、タジキスタンで食される「パロフ（炊き込みご飯）」をおむすびにした「黄色いパロフのおむすび」を試作した。



【りんごとチキンのおむすび】 【よもぎとホタテのおむすび】 【黄色いパロフのおむすび】

《青森市の大学生とタジキスタンの大学生による手紙交換》

青森市の大学生 29名（青森中央学院大学と青森公立大学が参加）とタジキスタンで日本語を学ぶ大学生 30名（ロシア - タジク - スラブ大学とタジキスタン国立言語大学が参加）

との間で、手紙交換事業を実施した。お互いに紹介したい暮らしや文化、観光地等をテーマに、手紙に加えてビデオメッセージの交換も行った。



【照明制作ワークショップ】



【ねぶた祭紹介】



【祭体験（ハネト）】



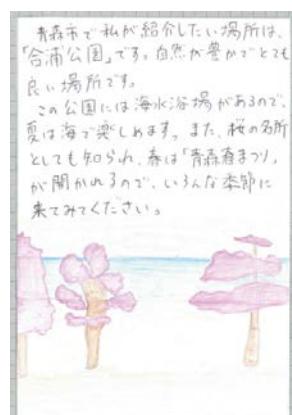
【おむすび試作の様子】



【文化理解の促進 手紙交換】



【青森公立大学・青森中央学院大学 大学生の手紙】



③ 事業の効果

《ねぶた師による青森ねぶた祭紹介、跳人体験、ワークショップ（ねぶたの技法を用いた照明製作》

ねぶた師による祭の説明やワークショップを実施し、直接祭に関わる機会を設けたことにより、祭をツールとした、青森市の魅力及びホストタウンとしての取組をPRすることができた。また、ワークショップ成果品と祭体験（ハネット）を披露した成果発表の場には、学生を中心に約300名が集まり、タジキスタン伝統の踊りも披露されるなど、効果的な文化交流を行うことができた。



【ねぶたの技法を用いた照明製作】

《青森市とタジキスタンの食材を使ったおむすびレシピ考案による食文化交流》

食を通じた交流をタジキスタン、青森市の両地で行ったが、参加者の反応は、ともに好評で、食を通じた交流は有効なツールであることが分かった。また、青森市で行った参加者へのアンケートの結果、市民が、食を含むタジキスタンの文化に高い関心を持っていることが分かった。



【食を通して知ろう！タジキスタン理解講座～おむすびプロジェクト～の様子】

《青森市の大学生とタジキスタンの大学生による手紙交換》

手紙には書ききれない部分を紹介したビデオメッセージにより、文字と顔、声が一体となった、より親近感のある交流となり、事業を通じて、相互理解の促進と更なる関心を惹きつけ、国際感覚の向上につながった。

④ 課題

タジキスタンの現地関係機関は、タジキスタン—青森市間の人の往来を希望しているが、限られた予算の中でいかに持続性のある交流ができるかが課題となっている。

今回は、初めての現地交流ということで、青森市が企画を行い、在タジキスタン日本大使館をはじめとする関係機関の全面的な協力をいただきながら、現地でも様々な交流を実現したほか、青森市においても市内国際交流団体等の協力を得てイベントを実施したが、今後も交流を継続していくためには双方の市民が主体となる交流へシフトしていくことが必要と考える。

⑤ 収録・編集した映像データ

交流事業の様子を収録し、外部上映できるように編集した。



⑥ 製作したポスター

これまでの交流事業の内容を取りまとめたポスターを製作した。

HOST TOWN BEYOND 2020
CULTURAL EXCHANGE PROGRAM

タジキスタン共和国・青森市
ホストタウン交流 2019-2020

AOMORI CITY & TAJIKISTAN

IN TAJIKISTAN

ねぶたの技法を用いたワークショップ

伝統をつたえる
ねぶた師 北村春一

おむすび紹介

伝統舞踊の披露

祭

大学主による手紙交換

繫

IN AOMORI

タジキスタン理解講座

浅虫温泉ねぶた祭に参加

高校生によるロシ“田舎町ガイド”

文部のきっかけと
今後の展望

11

(2) 山梨県山梨市

① 背景

スポーツ交流、食文化の融合、文化交流の事業を通じ、山梨市・キルギス双方の関心とホストタウン交流の取組に対する認知度を高めるとともに、関連機関及び団体とのネットワークの構築と、今後の交流課題の把握を行うことを目的として事業を実施した。

② 事業内容

《パワーリフティング競技をツールとしたスポーツ交流》

キルギスパラリンピック委員会及びキルギスパラパワーリフティング連盟とMOUを締結。その後、キルギスからパワーリフティング選手を招聘し、市民との交流や、お手紙交換を行っている市立笛川小学校で、交流事業を実施した。

《地元の食材とキルギスの食材を融合した、食文化融合縁結びプロジェクト》

山梨市への関心と理解を高めるため、地元の食材とキルギスの食材の融合を目的として、食文化を通じて縁を結ぶ「縁結びプロジェクト」を実施した。山梨市地域おこし協力隊員の協力のもと、現地で食文化についての意見交換を行い、おむすびの食材を選定調達し、3つのレシピを考案した。山梨市とキルギスの共通食材である「養殖サーモン」を用いた「甲斐サーモンのほぐしおむすび カッテージチーズ乗せ」、キルギスの食材である「馬肉の缶詰」を用いた「馬肉のツナマヨ風おむすび」、山梨市の特産である「花豆」を使った「三富の花豆お赤飯のおむすび」を試作した。



【甲斐サーモンのほぐし
おむすび カッテージ
チーズ乗せ】

【馬肉のツナマヨ風おむすび】 【三富の花豆お赤飯おむすび】

《お手紙交換を通した文化交流》

手紙交換を通じて、文化の理解と相互交流を図るために、山梨市の笛川小学校の児童にキルギスの子供たちへの手紙を書いてもらい、キルギスの小学校で紹介した。キルギスの小学生にも手紙の返事を書いてもらい、笛川小学校の児童に紹介した。手紙交換を通じて、お互いの歴史、文化、産業、日常生活などに触れるきっかけとなり、相互理解につながった。



【キルギスパラリンピック委員会・キルギスパ
ワーリフティング連盟とMOU締結（2020.1.15）】



【キルギス ビリムカナ カント小学校訪問】



【笛川小学校からのお手紙を受け取る
キルギスの子供達】



【キルギスからのお手紙を受け取る
笛吹小学校の子供達】

駐日キルギス大使・キルギス パラパワーリフティングチームの山梨市訪問



【山梨市表敬訪問】



【音楽交流】

③ 事業の効果

《パワーリフティング競技をツールとしたスポーツ交流》

東京パラリンピックの正式競技であるパワーリフティング競技をツールとして、山梨市の魅力、ホストタウンとしての取組をPRし、キルギスのパラリンピック委員会の方々やお手紙交換事業で訪問したキルギスの学校の生徒に、山梨市に関心を持ってもらうことが出来た。パワーリフティング競技の事前合宿誘致に関するMOUも締結し、競技関連団体とのネットワーク構築と今後の交流事業においての協力関係構築にもつながった。

《地元の食材とキルギスの食材を融合した、食文化融合縁結びプロジェクト》

キルギスの小学校で、山梨市とキルギスの食材を融合したおむすびを披露した。キルギスの小学生は、おむすびを握るのは初めてだったため、全ての工程に興味を持っていた。赤飯を使ったおむすびを披露した際、キルギスにはウルゲン米という赤飯によく似た色をした品種の米があり、親しみを覚えているようだったが、豆との組み合わせは初めてだったようで、山梨市の食文化に興味をもってもらうきっかけとなった。

《お手紙交換を通した文化交流》

お手紙交換については、手紙のやり取りに加えて、ビデオレターを通して、より具体的に思いを伝えた。更に、お手紙交換をしている山梨市的小学校を、キルギスの選手が訪問したことにより、子供たちもキルギスをより身近に感じることができ、効果的な事業にすることできた。

手紙交換を通して、相互理解の促進、国際交流の土壌が整い、東京2020大会への機運醸成に繋がった。

④ 課題

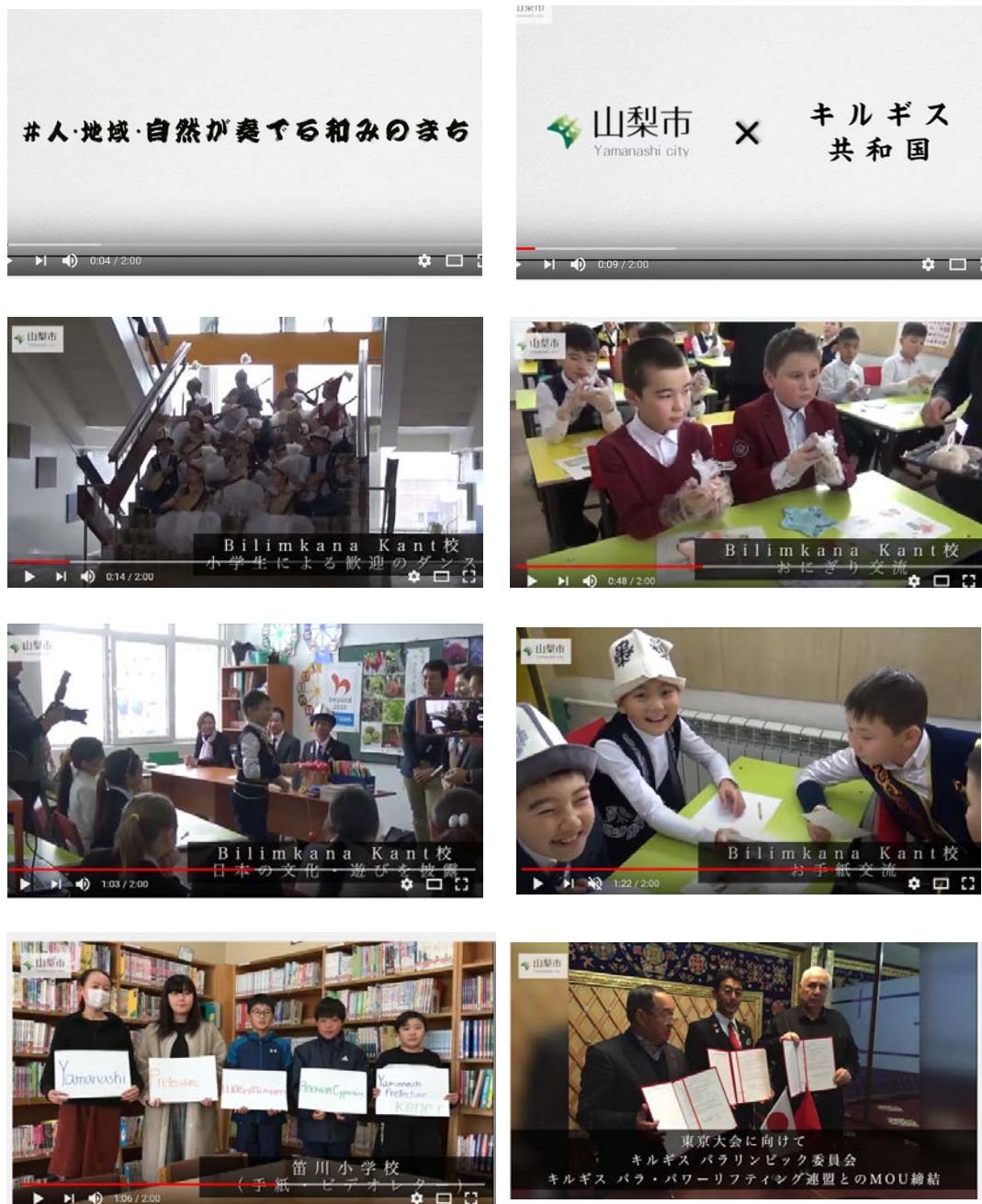
キルギスを相手国としたホストタウン交流は開始したばかりであり、市民に継続的に、キルギスについて周知していくことが必要であると考える。キルギスの認知度を上げていくため、市内報を活用して本事業の取組内容については、市民に周知したが、今後は、市のHP等も活用して積極的に情報発信を行っていく。

相手国との交流については、習慣、言語等の違いがあるため、今回渡航時に紹介いただいた方々にも協力いただき、相互理解を深める交流をしていくための仕組みを検討する必要がある。

大会終了後も持続的な交流を行うためには、交流計画の策定、山梨市とキルギスの関係者での体制や、市民に認知してもらい積極的に参加できる仕組みを構築することが必要であると考える。

⑤ 収録・編集した映像データ

交流事業の様子を収録し、外部上映できるように編集した。



⑥ 製作したポスター

これまでの交流事業の内容を取りまとめたポスターを製作した。

**縁結び
山梨県 山梨市 キルギス共和国**

これまでの取組
キルギスの伝説では、「キルギス人と日本人が兄弟で、肉が好きな者はキルギス人となり、魚が好きな者は東に渡って日本人となった。」と言われているキルギスの子供達と市内の子供達とのお手紙交換及び、日本食文化交流(縁結びプロジェクト)と、キルギス バラ パワーリフティングチームとの事前キャンプに向けた取り組みを行っています。

今年度の取組
2020年1月12日～18日(キルギス共和国にて、お手紙交換事業、縁結びプロジェクト事業、各種機関、団体との意見交換会を実施)

今後の展望
両国の子供達の語学、文化交流事業を実施、キルギスからの修学旅行、派遣事業などの受入を通じ、交流を促進、自治体間の連携



(3) 愛知県名古屋市

① 背景

ウズベキスタンと名古屋市の関係においては、古くから名古屋大学による法整備支援が行われ、現在は、同大学のサテライトキャンパスが運営されるなど、学術分野での交流を中心であり、このような学術分野での交流を基盤として、現地における名古屋市の認知度は、他の日本都市と比較して大変高い状態にあった。

このため、名古屋市の都市イメージをより高めることに加え、まだ知られていない、名古屋市の観光や文化的魅力を発信することで、ウズベキスタンにおける名古屋市のプレゼンスを向上させることが有益と考えた。

一方、名古屋市内においては、ウズベキスタンとの交流に関する認知度は高いとは言えず、市民への周知が課題となっていた。マスメディアの活用により名古屋市民がウズベキスタンとの交流に触れる機会をつくる必要があった。

② 事業内容

《ウズベキスタン交流イベント「Tashkent meets Nagoya」開催による文化交流事業》

ウズベキスタンにおける、ホストタウン・パートナー都市としての名古屋市の認知度向上を目的に、首都タシケント市において交流イベントを開催した。

名古屋市からは、なごやめし（味噌煮込みうどん）の「山本屋大久手店」や名古屋和菓子銘菓の「亀屋芳広」、ウズベキスタン産のドライフルーツ輸入業者の「アイエム・コーポレーション」の関係者や、名古屋大学の教職者、交流事業の広報取材としてラジオ放送局ZIP-FMのMCに協力を依頼し、現地での交流事業に参加いただいた。

イベントには、東京2020大会に出場予定のウズベキスタンのオリンピック選手、パラリンピック選手（一部選考中）他、一般市民約300名が参加して、名古屋市の紹介、なごやめし体験（名古屋の郷土料理をハラル化）や、名古屋とウズベキスタンの双方の郷土料理との創作体験（後述）、名古屋市とタシケント市のパートナー都市交流開始記念デザートのお披露目、和菓子の制作の実演を行った。

また、名古屋市とウズベキスタンとの交流の歴史紹介や文化講演、名古屋市長、ウズベキスタンのパラリンピック代表候補選手らが参加したボッチャ体験を実施した。



【交流会の様子】



【文化講演の様子】

《名古屋市とウズベキスタンの食材を取り入れた「おむすびレシピ制作事業」》

名古屋市とウズベキスタンの食材を使用したおむすびの試作（「世界むすびプロジェクト」）を実施し、名古屋名物の「天むす」をムスリムが食べられるようにアレンジした「ハラル天むす」、ウズベキスタンの代表料理「プロフ」を取り入れた「プロフおむすび」、ウズベキスタンの名物「グンマ（揚げパン）」の具材を日本風にアレンジした「グンマ軍艦おむすび」の3種のレシピを作成し、ウズベキスタンの選手を含むイベント参加者へ披露した。



【ハラル天むす】



【プロフおむすび】



【グンマ軍艦おむすび】

《お手紙交換事業》

名古屋市とウズベキスタン共和国の子どもたちが書いた手紙を交換した。

名古屋市の小学4年生（名古屋市立東山小学校が参加）とウズベキスタンの小学生との間で手紙を交換する事業を実施した。

なお、題目は、それぞれの「ふるさと自慢」とした。双方の記入した手紙を市民交流イベント「Tashkent meets Nagoya」内で展示し、本事業の成果報告を行うとともに、タシケンの市民に名古屋の子供達からのメッセージを届けた。

それぞれの手紙はイベント実施後、交換の上、各学校に届けられた。



【おむすびレシピ制作事業】



【お手紙交換事業】

③ 事業の効果

《ウズベキスタンでの市民交流イベント「Tashkent meets Nagoya」開催による文化交流事業》

本事業には、行政、大学、民間企業、小学校、民間友好協会、公益社団法人（名古屋青年会議所）など、様々な団体に関わっていただいた。その結果、それぞれの分野において、日本・ウズベキスタン間のネットワークが構築された。

具体的には、これまで交流のなかった名古屋青年会議所や小学校同士の交流の開始があ

げられる。

今回のプロジェクトを通じて、タシケントの小学校では、名古屋市的小学校からの手紙とともに名古屋市を紹介する「名古屋コーナー」の設置や、公益財団法人 名古屋青年会議所における子どもサッカー交流の検討など、今後につながるネットワークが構築された。

また行政においても市役所同士の交流だけでなく、ウズベキスタンのオリンピック委員会、パラリンピック委員会、外務省、現地大使館など、ハイレベルでの強い結びつきを持つことができた。



【ウズベキスタン共和国オリンピック委員会・パラリンピック委員会訪問】

《名古屋市とウズベキスタンの食材を取り入れた「おむすびレシピ制作事業」》

和菓子製作の実演や、おむすびレシピを試作し、現地での交流イベントにおいて一般市民の方に披露することで食文化を通して名古屋市の認知度向上につながった。また現地での交流イベント内容を名古屋市において、テレビ報道やラジオ放送などのマスメディアを使った情報発信がなされたことで、名古屋市民のウズベキスタンへの関心が高まり、東京 2020 大会への機運醸成につながった。



【和菓子製作の様子】



【現地でのインタビューの様子】

《お手紙交換事業》

今回の事業において、名古屋の小学校では、手紙の記入にあたり、事前に児童がインターネットを通してウズベキスタンについて学習する時間が設けられた。児童は、各自ウズベキスタンについて調べ、中には手紙のメッセージをロシア語で記入した子どももいた。

このような取り組みは、子ども達の国際的な視野を育むと同時に、東京 2020 大会のホストタウンとしての機運を醸成するものだと認識している。

また、上述のように、現地ウズベキスタンの小学校において、今回の名古屋の子ども達からの手紙を掲示し、名古屋市を紹介する「名古屋コーナー」が設置されるなど、ウズベキスタンにおける名古屋のプレゼンス向上にも大きく寄与したと考えている。



【お手紙の展示風景（一部）】



【名古屋市とウズベキスタンの生徒が描いた手紙（一部）】

④ 課題

事業の継続的な展開に向けた予算確保及び実施主体の育成が課題となる。
継続的な交流事業実施のためには、名古屋市としての独自の予算、さらには税金を使用しない民間交流への転換が必要となる。

実施主体の育成は、民間による自発的な活動を促進するためのフレームづくりが必要であり、今回の交流は、小学校や公益財団法人、民間企業など様々な分野における初期ネットワークの構築に寄与した。

今後はこのようなネットワークが発展し、市民レベルでの自発的な交流が促進されるよう、名古屋市の独自予算や、その他の行政的援助の方法を検討し事業に取り組むことが必要である。

⑤ 収録・編集した映像データ

交流事業の様子を収録し、外部上映できるように編集した。



⑥ 製作したポスター

これまでの交流事業の内容を取りまとめたポスターを製作した。



(4) 奈良県橿原市

① 背景

橿原市は奈良県と共同申請で東京 2020 大会に向けた、カザフスタン共和国のホストタウンに登録されている。

東京 2020 大会では、カザフスタンのパラリンピックチームの事前合宿を受け入れることで、橿原市民のみならず奈良県民が一丸となってカザフスタンを応援する予定である。

② 事業内容

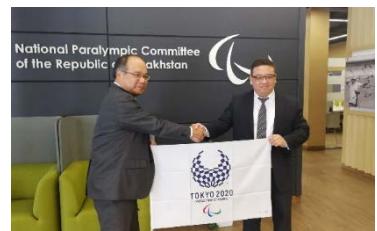
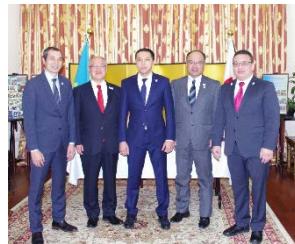
主として以下の 3 点の目的を達成するため、2019 年 11 月にカザフスタンを訪問した。

《カザフスタン選手団公式コスチュームのロゴデザインの協働制作およびパラリンピックチームの事前合宿の覚書締結》

カザフスタン選手団の公式コスチュームのロゴデザイン協働プロジェクト実施にあたり、公募によって決定した橿原市とカザフスタンのデザイナーが、ロゴデザインを協働制作することについて、デザインの決定権を持つカザフスタンオリンピック委員会と覚書を締結した。また同時に、カザフスタンパラリンピック委員会と東京 2020 大会でカザフスタン選手団が、橿原市で事前合宿を実施する覚書を締結した。



【覚書締結式】



【NPC訪問】

《橿原市とカザフスタンの地場産物や食材を使ったおむすびレシピ制作事業の実施》

現地の日本料理店 Café Momo にも協力いただき、オーナーシェフのアドバイスをもとに、カザフスタン食材の「さいぼし（馬肉）」と奈良県の伝統野菜である「結崎ねぶか」を使った「飛鳥さくらにぎり」、カザフスタンでよく食される「シャシリク（肉の串焼き）」を取り入れた「シャシリクにぎり」やハーブ素材である「ディル」を取り入れた「いろ鶏どりにぎり」のレシピを考案し、市内中学校にて試作会を実施した。



【飛鳥さくらにぎり】



【いろ鶏どりにぎり】



【シャシリクにぎり】

《樺原市内の小学生とカザフスタン生徒とのお手紙交換事業の実施》

樺原市内の小学校児童 41 名が、カザフスタンの生徒へふるさと自慢の内容でお手紙を作成し、交換するプロジェクトを実施した。

手紙を作成する前に、カザフスタンへの理解を深める為、樺原市のカザフスタン人の国際交流員から、カザフスタンの国や文化について紹介した。

カザフスタンでは、ヌルスルタン第 54 番学校を訪問して、樺原市を紹介すると共に、樺原市の小学生が作成した手紙を届け、樺原市の小学生に返信を書いてもらった。



【カザフスタンでのお手紙交換事業】

③ 事業の効果

《カザフスタン選手団公式コスチュームのロゴデザインの協働制作およびパラリンピック事前合宿の覚書締結》

カザフスタンのオリンピック委員会、パラリンピック委員会との覚書の署名式には、カザフスタンの国営テレビが取材にきて、放映されるなど、メディアを通して樺原市の現地での認知度が向上した。

樺原市では、これまで国内外において精力的にホストタウン交流事業を実施してきたが、今回の訪問、覚書締結により、カザフスタンオリンピック委員会、パラリンピック委員会との関係もより深まったため、東京 2020 大会に向けて、より一層連携していく。

《樺原市とカザフスタンの地場産物や食材を使ったおむすびレシピ制作事業の実施》

おむすびのレシピ開発では、樺原市のカザフスタン人の国際交流員を中心として、樺原市内の中学生、学校の調理員、栄養士の方に協力をいただいた。

食材によっては、馬肉等初めて扱うものもあり、カザフスタンの食文化に触れると共に、樺原市の食文化を確認する機会にもなった。

おむすびを通じて相手国に対する理解を深め、東京 2020 大会に向けた機運醸成にもつながった。

《樺原市内小学生とカザフスタン生徒とのお手紙交換事業の実施》

お手紙交換事業では、樺原市、カザフスタンの小学生共に、会ったことのない異国の方で暮らす同世代の子ども達が、どのような手紙をくれるのか、どのようなメッセージを送ると喜んでくれるだろうかと、お手紙の製作段階から、期待と高揚感が見て取れた。このような交流を通じて、ホストタウン相手国であるカザフスタンの価値観や大切にしているモノ・コトを学ぶことが出来た。

この手紙を通じた国際交流事業の取組みは、カザフスタンの生徒の保護者から高い評価を得て、後日在カザフスタン日本大使館宛に御礼のご連絡があった。

④ 課題

樺原市では、カザフスタン人の国際交流員を通して、カザフスタン側と円滑にコミュニケーションが図れているが、言語や商習慣の違いもあるため、国際交流員の任期終了後も、安定した連絡体制を維持することが必要であり、そのための体制づくりが課題となる。

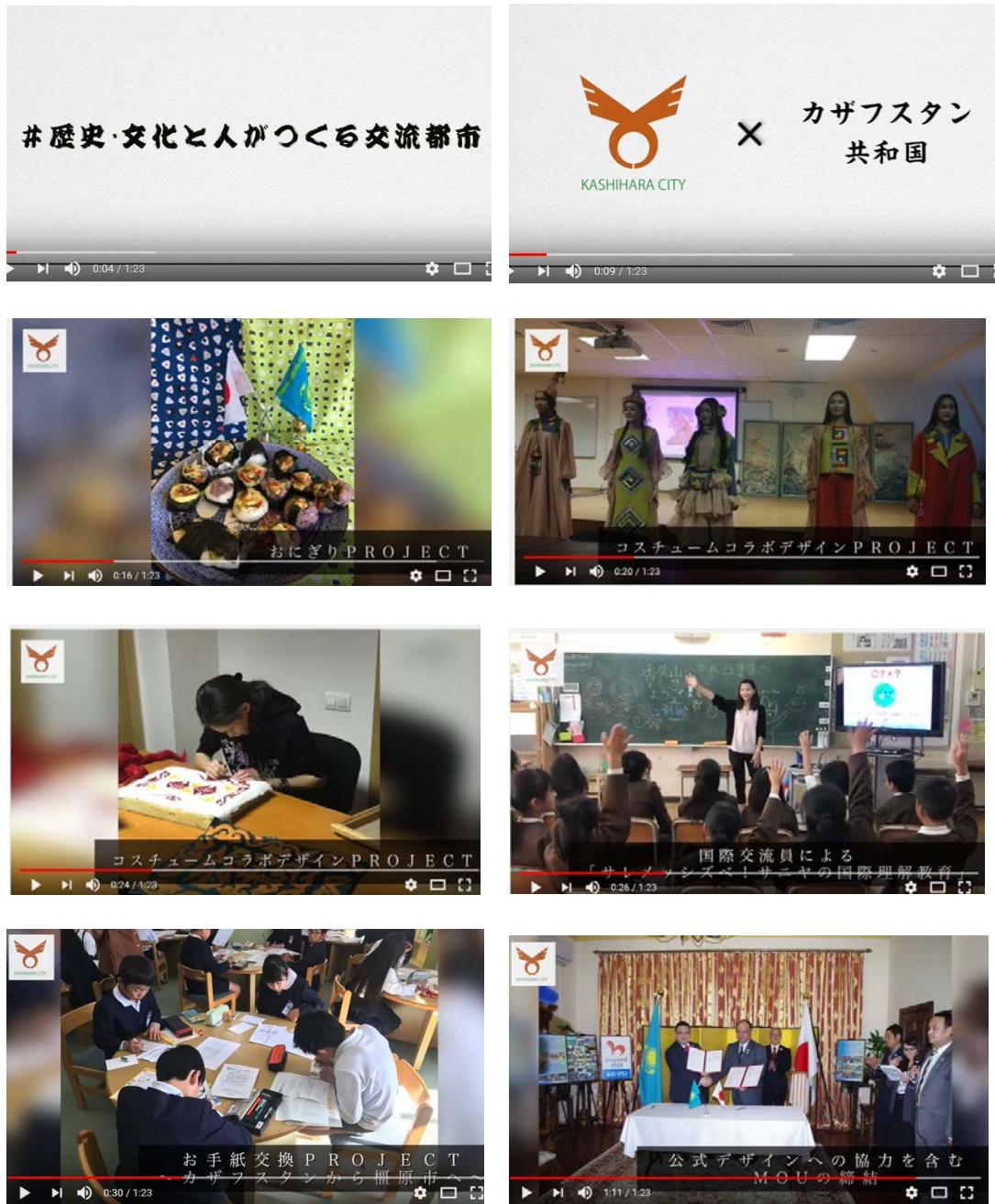
カザフスタン選手団公式コスチュームのロゴデザインの協働制作事業については、現地のオリンピック委員会とも連携しながら引き続き進めて行くが、カザフスタンと樺原市のデザイナー、関係者を含めたチームを構築して、組織として進めて行く必要があると考える。

パラリンピック委員会とも、事前合宿に向けた協議を継続するが、競技は決まっていないため、こちらもカザフスタンと樺原市が密に連携して進める必要があると考える。

おむすびレシピ制作事業やお手紙交換事業においては、樺原市内の小中学生を交えて取り組んだが、今後も継続できるように市内関係者と連携した体制作り等を検討していく必要がある。

⑤ 収録・編集した映像データ

交流事業の様子を収録し、外部上映できるように編集した。



⑥ 製作したポスター

これまでの交流事業の内容を取りまとめたポスターを製作した。



3. 中央アジア諸国を相手国としたホストタウンの横連携事業の成果報告

(1) 実施概要

中央アジアの調査事業では、青森市はタジキスタン、山梨市はキルギス、名古屋市はウズベキスタン、権原市はカザフスタンに訪問し、各国での交流事業の成果を報告会において発表予定であったが、新型コロナウイルス感染症の蔓延を考慮し、報告会は中止となった。

そのため、交流実績に関する資料と記録映像を作成して、これを聴取してもらった上で、国内外の中央アジア諸国の関係者に対しメールにてアンケートを実施することで、事業の効果や課題を取り纏めた。

各自治体の発表資料は別添として掲載する。

(2) アンケート結果

① 調査票

国内外の中央アジア諸国の関係者に対しメールにてアンケートを実施。

<p style="text-align: center;">オリパラ基本方針推進調査（ホストタウン） 「中央アジア諸国を相手国としたホストタウンの横連携事業の成果報告会アンケート」</p>	
<p><u>自治体名/国名 :</u> _____</p>	
<p>1 今まで他のホストタウンの取組をご存知でしたか？ ①はい ②いいえ</p>	
<p>2 成果報告会の資料は、今後のホストタウン交流を検討する上で、参考になりましたか？ ①とても参考になった ②参考になった ③あまり参考にならなかった ④参考にならなかった その理由を教えてください。 _____</p>	
<p>3 どこの自治体の発表資料が印象に残りましたか？（複数回答可） ①青森市 ②山梨市 ③名古屋市 ④権原市 その理由を教えてください。 _____</p>	
<p>4 3で印象に残った自治体に訪問してみたいと思いましたか。①はい ②いいえ</p>	
<p>5 ホストタウンの取組みについて、理解できましたか。①はい ②いいえ</p>	
<p>6 5で①とお答えされた方は、今後具体的にどんな取組みに参加したいですか。 ①文化交流 ②スポーツ交流 ③経済交流 ④青少年の交流 ⑤その他 _____</p>	
<p>7 ホストタウンの取組みについて、自分の周りの方に共有したいと思いますか。 ①はい ②いいえ その理由を教えてください。 _____</p>	

8 お住いの自治体でホストタウンの取組みをしていたら参加したいですか。

①はい ②いいえ

9 東京大会以降も、ホストタウンと相手国が交流を続けるには何が必要だと思いますか。
あなたはどのような形で関わっていきたいと思いますか。

9 ホストタウン交流に関してご意見・ご感想など自由にご記入ください。

アンケートはこれで終了です。ご協力ありがとうございました。

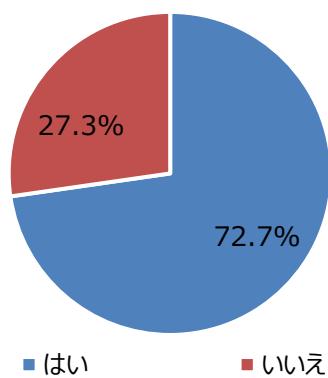
② 集計結果

実施日時：令和2年2月28日～3月5日

実施方法：国内外の中央アジア諸国関係者に対しメールにてアンケートを実施・回収

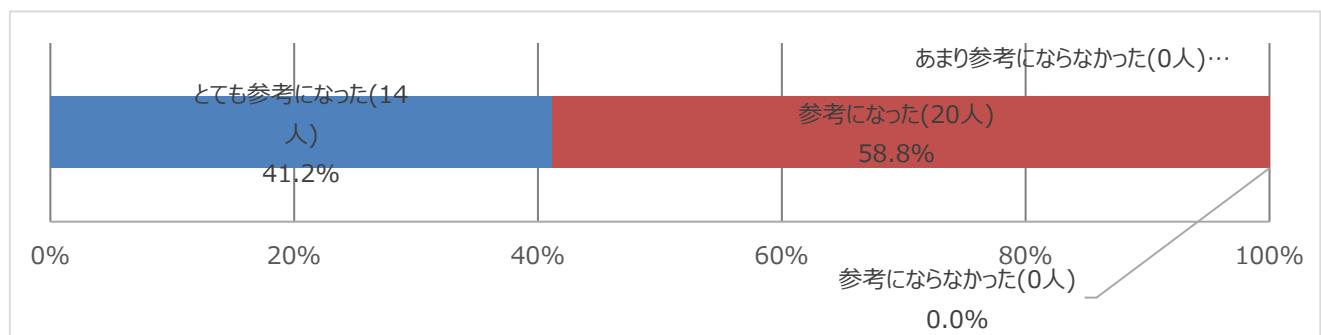
回答者：35名

1. 今まで他のホストタウンの取組をご存じでしたか？



※無回答 2名

2. 成果報告会の資料は、今後のホストタウン交流を検討する上で、参考になりましたか？その理由も教えて下さい。



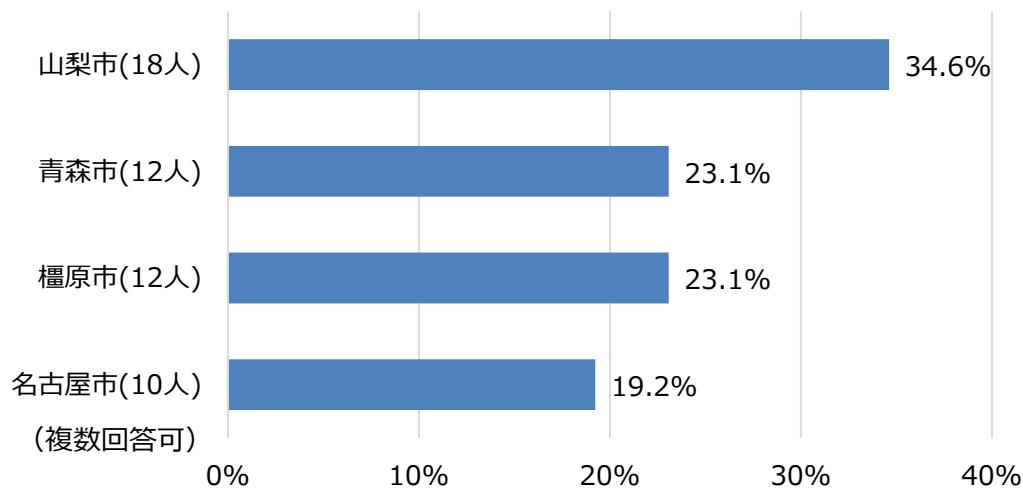
※無回答 1名

【とても参考になった・参考になった：理由】

- 各自治体が工夫を凝らして、ホストタウンとしての自覚のもとに、相手国の競技の支援、応援になるような取り組みを見ることができた。また、それを、関係者間で共有できた
- 中央アジアの他地域、他の自治体でも、同じような事業（お手紙・食）を展開する中で、在外公館としては他国の状況をあまりフォローできていなかったので、事業の実施やその後の効果、見せ方など、大変参考になった
- 各自治体の創意工夫を知ることができた
- 他の自治体の具体的取組みを知る機会がこれまでなかったが、今回の報告会（資料の共有）では、本市の事業に応用できる内容もあった
- 他自治体の交流の様子が理解できた
- 他市の取組みを知ることができ、他市の良いところを学ぶことができたため
- 交流があまりない地域である中央アジア地域の風土、国土などが研修できることことができた
- 他のホストタウンの取組みが分かって良かった
- 国や自治体にとって、ホストタウン交流のきっかけやその企画は違うものの、色々な自治体の取組みを共有することができた
- 自分たちで気が付かないような交流方法、アイデアを知る機会になった
- 各自治体のホストタウンに交流する姿勢、取組みを知ることができた
- 今後、ホストタウン交流の際にご協力させていただくに際し、そもそもどのような既存の取組がなされているのか把握でき役立った
- 各自治体の強みと受け入れ国の特徴を融合させた取組みが多く、互いの地域の住民レベルで交流できるアイデアが非常に多かった
- 同じ相手国のホストタウン自治体が実施した取り組みを知ることができた
- いかに幅広い市民を巻き込んで実施するか、他自治体の取組みが参考になった
- 公式ユニフォームのデザインを共同で行う取組は相手国と共通の成功体験を得ることができ、互いの絆を深める良い手法であると感じた
- 他の自治体の活動がよくわかった
- 食文化やお祭りなど、市民と選手が一緒に楽しめるので、良い交流ができると感じた
- オリンピックを東京で迎えにあたり、それを機会する交流は大切と理解できた
- 自治体毎、独自の強みを前面に出しており、地域の魅力を再度見直して新しい分野の交流も可能ではないかと感じた
- 他市町村がどのような交流をしているのかが分かり参考になった。おむすびを握るという企画も衛生面は気を付けなければならないが、交流を深めながら日本の食文化に触れられるいい交流になりそうだなど感じた

- 人や予算のかけ方が違うが、アイデアを生むキッカケにはなりそうだと感じた
- いかにスポーツ以外の分野にも交流の輪を広げていけるかが重要だと感じた
- 青森市で盛んに生産されている「りんご」の原産国が中央アジアといわれており、りんごが結んだホストタウンとなっている。そのことを初めて知った。今後、青森市の素晴らしいリンゴプロジェクトをタジキスタンにて実施したい

3. どこの自治体の発表資料が印象に残りましたか？その理由も教えて下さい。



【山梨市：理由】

- キルギスのパラリンピック選手にフォーカスし、ホストタウンとして応援していることが、山梨市民だけではなく、キルギスの選手にも伝わる
- 手作り感のあたたかさを感じる
- 人物交流が一番の成果（と今後へのつながり、という期待）という観点から、交流時の写真が多く視覚的に成果がよくわかった
- 互いの国の小学生の活動を巻き込んだ草の根レベルでの交流が面白いと感じた
- 同じ国（キルギス共和国）のホストタウン自治体（山梨市）が実施した取り組みを知ることができた
- 山梨のパラ選手との交流は外国との交流だけでなくパラスポーツの理解や振興にも大きな一助となるので貴重だと思う
- 子供達の交流が行われており、今後さらなる発展をした交流をしてほしい
- 親日感が伝わった
- 子ども同士の交流が素敵だと思ったため
- 昔から山梨県の葡萄やワインが美味しいと良く耳にしていたが、今回の資料を読んで是非とも行ってみたいと思った。タジキスタンでもおいしい葡萄ができるが、ワインを製造する技術が無い為、山梨市のワイン技術を参考にして、将来

的には広く中央アジアの枠組みで、山梨市＋タジキスタンのワイン交流も検討していきたいと考える

【青森市：理由】

- 人物交流が一番の成果（と今後へのつながり、という期待）という観点から、交流時の写真が多く視覚的に成果がよく分かった
- 実際に市の職員の方がタジキスタンを訪れてねぶた祭の紹介やダンスを披露した点
- 取組みがうまくまとめられていた
- 青森のねぶた体験はシンプルに楽しそうであった
- 和やかな雰囲気が伝わった

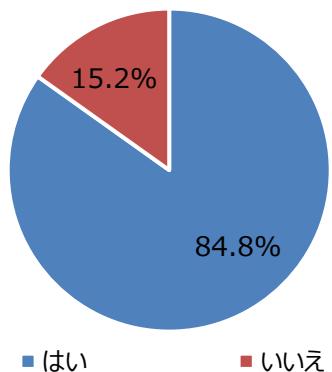
【樺原市：理由】

- ビデオ映像を比較した限り、同市が最も多岐・他分野にわたる交流をしているようだった。草の根交流の名の通り、市民レベルでの交流が活発な様子がよく見て取れた。
- 資料がきめ細やかく作成されていた
- 公式ユニフォームのデザインを共同で行う取組は相手国と共通の成功体験を得ることができ、互いの絆を深める良い手法であると感じた
- デザインという観点は面白いと思った
- 樺原市とカザフスタンのロゴデザイン協働制作は、オリジナリティがあり良かった
- 同じカザフスタンのホストタウンとして参考にできる部分があった
- 同じカザフスタンのホストタウンであり、これまでも継続した交流をしてきていることが本市に無い部分だと感じた
- 独自性のある取組みだった

【名古屋市：理由】

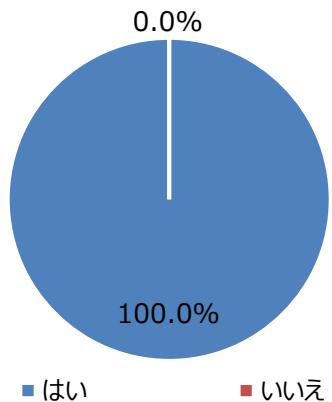
- 交流の幅が広く感じた
- 映画とのタイアップやSNSで拡散されやすい仕掛けなど、独自の取組が参考になった
- 市長自ら現地に出向き交流を行った
- 目標が数値化されており、より明確な印象を受けた
- タシケントと名古屋のそれぞれの市民に対するホストタウン交流の成果が限定的とは言え、定量的に見えていた

4. 3で印象に残った自治体に訪問してみたいと思いましたか



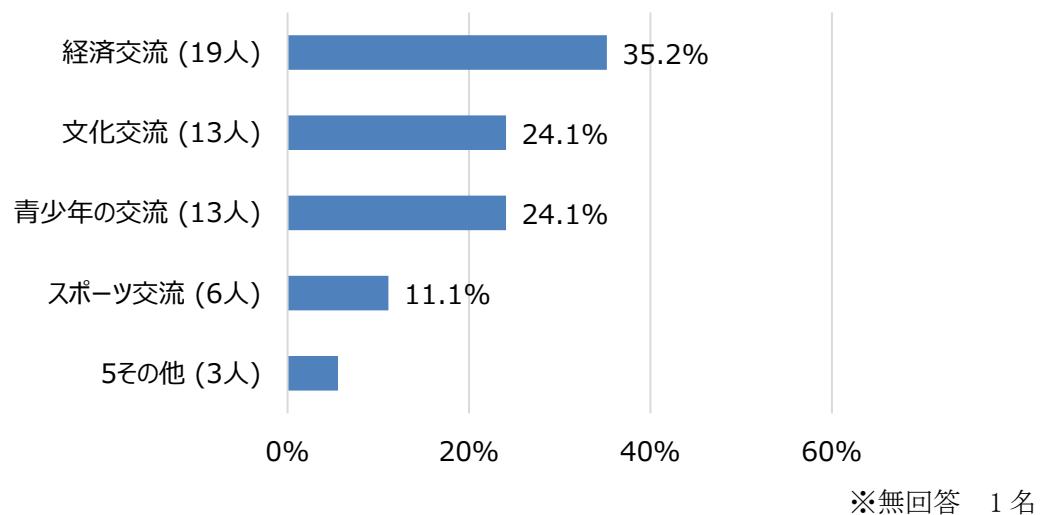
※無回答 2名

5. ホストタウンの取組みについて理解できましたか



※無回答 1名

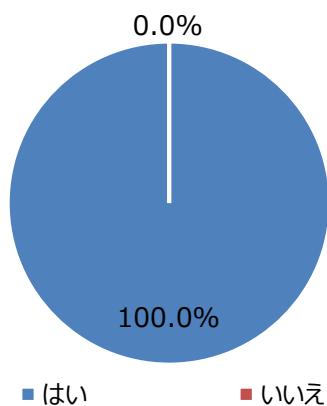
6. 5で「はい」とお答えされた方は、今後具体的にどんな取組みに参加したいですか



【上記以外のその他の取組み】

- 各ホストタウン自治体の方々による国際協力により、息の長い交流や信頼関係の醸成を図ることができると良いと考える
- 相手国と姉妹都市となり、末永い都市間交流を行いたい

7. ホストタウンの取組みについて、自分の周りの方に共有したいと思いますか。その理由も教えて下さい。



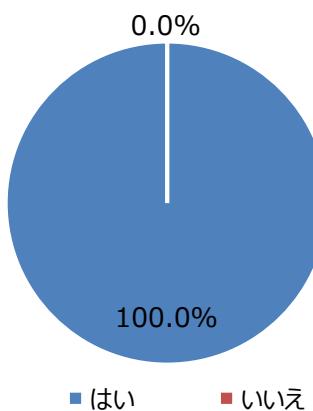
※無回答 2名

【共有したい：理由】

- 地方都市の活性化に繋がるから。また、ホストタウン交流を通じて、地方の若者のグローバル感覚醸成に期待できる
- 他の民族の文化、習慣にふれる楽しさを伝えたい
- 普通に暮らしていたら縁がないであろう他国の人々を知り、見分を広める良い機会だから
- 双方の国の文化について知る良い機会だと思うため
- オリンピック・パラリンピックという世紀の祭典を東京で開催できることは、日本国民として誇らしい。そして、ホストタウン事業を通じ、色々な国の選手や関係者が、東京だけではなく、地方の市町村を訪問し、交流することで、より日本を知ってもらう機会となると考える
- 身近なところで異文化交流のできる良い機会である
- 国内の地方都市の市民、特に子供たちに対し、異国の文化、生活、習慣を身近に感じる機会を提供し、国外に関心を向けたり、翻って自らの文化を見つめなおす契機ともなり、長期的な視点での日本の国際化に繋がる事業だと考えるため。また、ホストタウンの取組は、東京大会を日本全体で受け止めて機運を高めることにも貢献すると考えるため。
- 関心がある国のホストタウンについては詳しくても、自分の出身地や現在住んでいる場所がどの国のホストタウンで何をしているのか、積極的に調べていなかつたことに気付いた。そのため、知っている人が積極的に発信しないと地元の人でも機会のない限り、関わりを持つことは難しいと感じるたから。

- ホストタウンの取組を通じて、より多くの人に中央アジアについて知ってもらいたいと感じたため
- 見分を広める良い機会となるため
- 外国の文化や人柄など、映像や文字情報だけでなく実際にふれることができる貴重な体験になるため
- 1人でも多くの市民が取組みのことを知り、事業を盛り上げる必要があるため
- キルギスは親日国とのことなので、今後様々なホストタウン交流に期待したい
- これからの中学生は海外に目をむけるべきと考えるから
- 良い取り組みなので多くの方に知ってもらいたいと思うが、体験した人でないと、なかなか知る機会がないので、少しでもホストタウンの取組を広めていきたいから
- 親日感のあるキルギスの事を多くの市民に伝えたいから
- 日本に世界中の方々が集まることはめったになく、他国の方と触れ合うことができる貴重な体験であるため。
- 食文化や歴史遺産（シルクロード）などの知識を高めていきたいため
- まだまだ取組みが浸透しているとは言えないため
- 異文化との交流を通じて新しい発見につなげて欲しいと考えるため
- ホストタウンの取組みを知ることで、相手国の文化などを知るいい機会にもなるため
- 他国との交流を深めるために、オリンピックやホストタウンは大きなチャンスであると考える
- ホストタウンの交流に多くの人が関わり、継続することで、将来の国際化に通じると考えるため

8 お住まいの自治体でホストタウンの取組みをしていたら参加したいですか



※無回答 1名

9 東京大会以降も、ホストタウンと相手国が交流を続けるには何が必要だと思いますか。
あなたはどのような形で関わっていきたいと思いますか。

【※自由記述】

(交流に関する事柄)

- お互いの国への訪問
- 市民レベルの交流を大会前後に多方面にわたって実施し、相手国に対するファンを増やすこと。友人ができて親近感がわけば、交流は維持できると思う
- 民間レベルでの交流（企業間含む）。（個人としては、今後も通訳や翻訳として関わっていきたい）
- お互いの文化、伝統等に興味を持ち、文化やスポーツを中心とする交流であれば継続すると考える。個人としては、通訳等言葉の面で、協力できればうれしく思う
- 住民レベルでの継続的な交流。特に小学生や中学生を交流活動に巻き込むことで、国際理解教育の一環となり、継続性も期待できるため効果があると感じる。また対象地域の民間企業などに対象国に関心を持ってもらい、より人やモノの往来が活発になるようサポートできればと思う

(資金に関する事柄)

- 特に開発途上国のは、交流に係る資金（財源）が必要だと考える。資金は、国あるいは自治体で予算を確保する必要があると思料する。また、双方にとって、ホストタウン交流を継続的に意識させるには、相互の青少年交流が望ましい。若い世代が相互の理解を通じ、親しみや憧れを持つことにより、継続的な交流が期待できると思う。そのためには、政府が行う国際交流事業の活用や、姉妹都市提携、大学間交流協

定締結も、交流促進のきっかけになると考える。個人としては、関心のある国の国内のホストタウンの自治体の動向を追いつつ、参加できること、アドバイスできることがあれば参画していきたい

- 日本の自治体及び対象国のカウンターパート機関との継続的なコミュニケーションが重要。その中で、なぜ、オリパラ後も交流するのかを双方確認し、交流予算を確保するのが重要。双方のトップレベルだけではなく、草の根レベルでの相互交流の重要性を認識できるような機会（特に若い世代の交流）を作るのが良いのではないかと思う
- 交流などにかかる資金面の問題が課題となっていくので、何らかの助成金は必要である

（実施体制に関する事柄）

- ホストタウンの担当課として、スポーツ課だけがほぼ対応している自治体は、可能な限り、国際交流を担当する課を早く巻き込み、オリパラで終わらせないようにすること。お手紙交流その他の事業で交流のきっかけをつくった日本・相手国の双方の協力機関に、その一度限りで終わらせず、その後の交流を検討してもらうこと。新しいことをするのは大変だと思うので、もう一度同じことを、できる範囲ででも、何かしら継続の端緒を予めつけておければよいのではと思う
- 双方の顔の見える関係の構築。こうしたホストタウンの取組をきっかけとして、ぜひ相手国への国際協力という形で今後ともご協力頂けると非常にありがたく、国際協力を通じ、お互いの理解促進、信頼関係醸成を図ることができるとよい。国際理解教育など、学校教育の中で継続的に相手国への理解を子供たちにも伝えていくことも必要と考える。
- 大会以降は行政の予算も限られることが予想されるため、民間を巻き込んだ持続可能な交流の在り方を検討していく必要がある
- 子どもはもちろんあるが、より多くの一般的市民を巻き込むことで継続した交流がはかれると思う。互いの文化を伝えたり、教わったりできるものが良いと考える
- 相手国との長期的な交流計画を策定し、継続的に交流を行う体制を築くことで、相手国と自治体間の関係を発展させていきたい。

（情報共有、発信に関する事柄）

- 相手国についてもっと自治体から情報を共有する必要がある
- 定期的なホストタウン、相手国との往来。今後は、まだ日本国内や自治体内で認知度の低い相手国をどのようにPRしていくか
- ホストタウンによって身近になった国々に対して、引き続き関心を持ち続けることが重要だと思う。行政が中心となる交流は時流に流されてしまうこともあるので、市民が主体的に情報や情報収集できる雰囲気づくりができればと思う

(その他)

- 相手国と自治体双方にとってメリットがあるような、オリンピックレガシーの創出が必要（例：オリンピック選手団を受け入れた自治体として合宿の聖地PRし、オリンピック選手を韶聘して、他市町村チームとも合同の大規模な合宿を行う等）
- お互いを理解し思いやる心が必要。自治体職員として市民全体が関わられるような取り組みを模索することを業務とし、係わっていきたい
- ホストタウンを契機とした姉妹都市の締結
- 市民のホストタウンに対する関心が必要だと思う。相手国の文化交流のイベントなどあれば参加しようと思う
- 相手国の文化についてもっと知識を深める
- 相互の目的や目標が明確であり、Win-Winの関係であり続けること
- オリンピック（スポーツ交流関係）に限らず、文化交流など様々な交流をもつため外国交流の主管課などと協力していくことが必要
- 現時点からオリンピック後を見据えた関係を築くこと
- 相手国とコミュニケーションをとり、経済交流も行うこと

10 ホストタウン交流に関してご意見、・ご感想など自由にご記入下さい

【※自由記述】

- オリンピック・パラリンピックを契機に、日本人が持つ「おもてなし」文化や食文化等を世界に広報する良い機会と考える。また、特に日本の青少年が、内向き志向といわれる昨今、ホストタウン交流を通じて、まだ見ぬ世界に強い関心を持つことは、彼ら彼女らが、成人した際に、必ず、グローバル感覚を（少しでも）持った人材になると思う。東京2020大会後については、それぞれの自治体のきっかけ作りと、相手国側（特に開発途上国）の自助努力が必要であるが、交流によるメリット（場合によつては、技術移転や企業進出等もある）を双方で継続して共有していくことが重要であると考える
- オリンピック準備、開催期間中だけでなく、その後の交流も見据えたホストタウン交流は、とても良いと思う
- コロナの影響で様々な制約もでていて大変だと思いますが、がんばってください！おむすびは拡散させやすそうでおもしろいですね！中央アジアを相手国とする各自治体の給食や市役所の食堂で中央アジア食べ比べメニューにしていくとか・・・各国だいたいネタ・食材は共通利用できるものなので、その点を生かして自治体間横連携的とかに使えそうと思いました
- 一生に一度のことなので、盛り上げていきたい

- 多くの自治体が参加することによりさらに日本のグローバル社会の構築に寄与できることだと思います
- ホストタウン交流の大切さ、重要さを改めて考えた
- 今後もより深く交流をすることができるべきだと思う
- 青森市とタジキスタンがホストタウンになったことに大変嬉しく思う。今後ともこの交流が継続することを心より期待している。タジキスタンはまだ途上国なので日本国に対して丁寧な対応及び円滑な進め方の経験も少ない為、現場でトラブルが生じやすいこともあるが、皆で協力して進めていきたい。

(課題)

- ホストタウンとして登録していない自治体住民はあまり事業のことを知る機会がないと感じるため、全国的にキャンペーンなどが実施されると良いと思う
- ホストタウン事業を現在内閣官房が中心となり実施し、ホストタウンアピール実行委員会が、精力的に推進しているが、まだまだ国民への浸透が少ないとされる。各ホストタウンの自治体は、自らの市民に周知させることはもちろんだが、ホストタウン事業全体をオリパラ開始までに、メディアやイベントを通じ、広報していく必要がある。日本全体でホストタウン事業を盛り上げ、オリパラの成功に向けた機運が高まることに期待したい
- 文化・スポーツ交流、さらに、子供たち間の交流は素晴らしい。相手国において、もっと情報発信を行った方がいい
- まだまだ、一般的な認知度は高くないようだ。新型コロナウイルス感染症の拡大によりイベント関係は全般に下火であるが、イベント以外の方法で取組みの周知ができるよう考えて行く必要があるように思う
- オリンピック・パラリンピック期間にとどまらず、継続的な交流が実施されるよう国や自治体からのサポートも継続的に行われればなお良いと感じる。人材の派遣などは資金面の負担も大きいため、イベント期間が終わってもある程度の交流ができるようなサポートやアイデアを自治体等が積極的に発信していくことが重要と感じた
- 一過性のムーブメントに終わらせず、2020年大会後も交流を継続していくには、行政ではなく、民間・住民指導による自発的な取り組みが不可欠だと感じている

第3章. 成果のとりまとめ

第2章の「各プロジェクトの実施結果」をもとに、以下の評価軸ごとに事業成果を整理し、分析を行う。これにより、各調査対象プロジェクトの評価及び横断的分析による他ホストタウンへの展開等につながる示唆を検討する。

(評価軸)

- ・ホストタウン内への波及効果
- ・事業実施により達成できた目標
- ・相手国への波及効果
- ・2020年東京大会を契機としたレガシー創造への寄与

事業の成果概要

	ホストタウン内への波及効果	事業実施により達成できた目標	相手国への波及効果	レガシー創造への寄与
青森市	<ul style="list-style-type: none">・市と民間団体共催のおむすびレシピ制作事業による市民のタジキスタンに対する関心及び認知度の向上・お手紙交換事業によるタジキスタンに対する親近感の増大	<ul style="list-style-type: none">・双方への関心とホストタウン交流の取組に対する認知度向上・ねぶた祭実演による効果的な青森市の文化紹介・食を通じた交流による青森市民のタジキスタンに対する関心の向上・手紙交換を通じた相手国への関心及び国際感覚の向上	<ul style="list-style-type: none">・祭をツールとした青森市の魅力及びホストタウンとしての取組のPRと効果的な文化交流	<ul style="list-style-type: none">・在タジキスタン日本大使館や JICA タジキスタン事務所とのネットワーク構築
山梨市	<ul style="list-style-type: none">・市内小学生とキルギス小学生が手紙交換を通じて、お互いの歴史、文化、産業など、相互理解が促進。	<ul style="list-style-type: none">・キルギスのパラリンピック選手を山梨市に招聘し、市民にキルギスの魅力を周知すると共に、パラスポーツ	<ul style="list-style-type: none">・おむすびをツールとして、山梨市の食文化を紹介することは、山梨市を知ってもらう上で、非常に効果的	<ul style="list-style-type: none">・キルギスのパラリンピック委員会、パラパワーリフティング連盟とMOUを締結し、大会に向けた交流事業

	ホストタウン内への波及効果	事業実施により達成できた目標	相手国への波及効果	レガシー創造への寄与
	<ul style="list-style-type: none"> ・キルギスのパラリンピック選手が山梨市に来て市民と交流することで、東京2020大会への機運を醸成すると共に、市民のパラスポーツへの理解を深め、キルギスを身近に感じてもらうことが出来た。 	<p>ツを身近なものとして感じてもらうことが出来た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キルギスで食文化を紹介する事業を実施し、山梨市への関心と理解を高めてもらうことが出来た。 ・山梨市内の小学生とキルギスの生徒を対象にお手紙交換事業を実施し、手紙での交流を通じて、山梨市とキルギス双方への関心が生まれた。 	<p>であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お手紙交換事業でも、山梨市の生徒によるお手紙を受け取ったことで、山梨市を身近に感じてくれるキルギスの生徒が多数いた。 	<p>を積極的に検討している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キルギスのパラリンピック選手が山梨市を訪問することで、市民がキルギスとパラスポーツを理解する良い機会となり、共生社会への理解も促進出来た。
名古屋市	<ul style="list-style-type: none"> ・マスメディアを活用し、ウズベキスタンで実施した交流事業を名古屋市民に周知し、ウズベキスタンの認知度向上に寄与した。 ・お手紙交換事業は、子ども達の国際的な視野を育むと同時に、東京2020大会のホストタウンとしての機運を醸成した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ホストタウンイベントでは、名古屋市を様々な角度から紹介した。多くの市民が来場し、イベントの様子は、相手国のメディアやSNSで発信され、名古屋市の魅力を多くの方に広めることに成功した。 ・名古屋市でもその様子がメディアで放映されることで、名古屋市民の 	<ul style="list-style-type: none"> ・タシケント市において交流イベントを開催し、多くの市民に名古屋市を周知することが出来た。 ・お手紙交換事業では、ウズベキスタンの小学校では、名古屋市の小学生の手紙を「名古屋コーナー」として紹介するなど、今後も継続する交流のきっかけとすることが出来 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウズベキスタンのオリンピック委員会、パラリンピック委員会、外務省、在ウズベキスタン日本大使館などとハイレベルな関係を構築した。 ・民間交流の促進に向けたネットワーク構築

	ホストタウン内への波及効果	事業実施により達成できた目標	相手国への波及効果	レガシー創造への寄与
		<p>ウズベキスタンに対する認知度が向上し、東京 2020 大会への機運醸成につながった。</p> <ul style="list-style-type: none"> 手紙交換を通じた子ども達の国際教育の促進及びホストタウン交流の機運醸成につながった。 	た。	
権原市	<ul style="list-style-type: none"> お手紙交換事業を通じて、権原市の生徒は、ホストタウン相手国であるカザフスタンの価値観や大切にしているモノ・コトを学ぶことが出来た。 お手紙交換事業を通して、権原市内の小学生の、カザフスタンの文化や相手国を理解する気持ちを育むことが出来た。 	<ul style="list-style-type: none"> カザフスタン選手団のコストユームデザイン協働プロジェクトにかかる覚書とパラリンピックチームの事前合宿に係る覚書を締結した。 おむすびレシピ制作事業を通して、市内関係者のカザフスタンの文化理解と東京 2020 大会への機運醸成につながった。 お手紙交換事業を通して、権原市内の小学生の、カザフスタンの文化や相手国を理解する気持ちを育むことが出来た。 	<ul style="list-style-type: none"> お手紙交換事業を通じて、カザフスタンの生徒に、権原市に関心を持ってもらうことが出来た。カザフスタンの生徒の保護者からも、手紙による国際交流の取組について高い評価を得ることができた。 カザフスタンのオリンピック委員会、パラリンピック委員会との覚書締結は、現地メディアでも放映されたため、相手国における権原市の認知度を向上させることが出来た。 	<ul style="list-style-type: none"> カザフスタンのオリンピック委員会と東京 2020 大会のユニフォームデザインに関するMOUを締結し、パラリンピック委員会とも事前合宿に関するMOUを締結することが出来た。MOUの締結を機に、より具体的に事業を進めることができた。

1. ホストタウン内への波及効果

(1) 事業の成果概要

・青森市：

食を通してタジキスタンを知ってもらうこと目的に、一般社団法人青森市国際交流協会と「食を通して知ろう！タジキスタン理解講座～おむすびプロジェクト～」を共催し、タジキスタンの家庭料理の調理やおむすびレシピの試作会を開催することで市民へのタジキスタンへの関心や認知度向上を図った。

また、お手紙交換事業により、大学生の間でタジキスタンへの親近感が増大した。

・山梨市：

山梨市内の小学生を対象にしたお手紙交換事業を実施したことで、キルギスの言語や文化へ関心が生まれた。キルギス渡航時の事業を市内報に掲載して市民に配布することで、取組の内容を多くの市民に周知出来た。

キルギスのパラリンピック選手が山梨市に来て市民と交流することで、東京 2020 大会への機運を醸成すると共に、市民のパラスポーツへの理解を深め、キルギスを身近に感じてもらうことが出来た。

・名古屋市：

お手紙交換事業実施にあたり、名古屋の小学校では、事前に子ども達がインターネットを通してウズベキスタンについて学習する時間が設けられた。子ども達は、各自ウズベキスタンについて調べ、手紙のメッセージをロシア語で記入した子どももいた。このような取り組みは、子ども達の国際的な視野を育むと同時に、東京 2020 大会のホストタウンとしての機運を醸成するものだと認識している。

また現地での交流イベント内容を、名古屋市において、テレビ報道やラジオ放送などのマスメディアを使った情報発信がなされたことで、名古屋市民のウズベキスタンへの関心が高まり、東京 2020 大会への機運醸成につながった。

・権原市：

お手紙交換事業では、権原市の生徒は、会ったことのない異国の地で暮らす同世代の子ども達が、どのような手紙をくれるのか、どのようなメッセージを送ると喜んでくれるだろうかと、手紙の製作段階から、期待と高揚感が見て取れた。このような交流を通じて、ホストタウン相手国であるカザフスタンの価値観や大切にしているモノ・コトを学ぶことが出来た。

（2）各調査対象プロジェクトの実施結果に対する評価と今後の課題

・青森市：

アンケートからはおむすびレシピ制作事業、お手紙交換事業ともに高評価を得たことがわかる。

おむすびレシピ制作事業では、両国で共通の具材があったこと、また、タジキスタンの炊き込みご飯であるパロフをおむすびにするギャップ感が関心を高める結果となったと考えられる。

お手紙交換事業では、タジキスタンの日本語のレベルの高さによりコミュニケーションが円滑であったこととともに、メディアでは知り得ない細かい情報を知ることができた点が関心を高めた面が大きいとともに継続的な交流としていくことが今後の課題。

・山梨市：

キルギスのパラリンピアンとの交流を通じて、多くの市民にキルギスを知ってもらうことが出来た。

また、お手紙交換事業を実施したことで、山梨市の生徒にキルギスの言語や文化へ関心が芽生えたことは成果であった。一度で終わることがないように、継続的な交流としていくことが今後の課題。

・名古屋市：

お手紙交換事業の実施により、子ども達の国際的な視野を育むと同時に、東京 2020 大会のホストタウンとしての機運を醸成することが出来た。

また、現地での交流事業の様子を、名古屋エリアのテレビ報道、ラジオ放送されることで、名古屋市民のウズベキスタンへの関心を高めることができたことは成果として挙げられる。

子ども達の交流については、継続的な交流としていくことが今後の課題。

・権原市：

権原市の生徒が、お手紙交換事業を通じて、相手国の子どもに想いを馳せて、カザフスタンの価値観や大切にしていることについて学ぶことが出来たのは成果であり、継続的な交流を行っていきたい。

・横断的：

お手紙交換事業では、各自治体の生徒達が、自分の自治体を見つめなおし、相手国の文化や価値観を学び、考える貴重な機会となった。今まで個人的には繋がりの無い国であっても、お手紙交換を通じて、相手国に関心を持つことで、国際的な視野を育むことにも寄与するを考える。

ホストタウン交流をより自治体内で周知するため、市内報、市の HP の活用等もあるが、

名古屋市の事業はテレビ番組で放映され、ラジオでも掘り下げて放送されることで、今までホストタウン事業に関わってこなかった方々にも興味を持ってもらう機会を作ることが出来たため、効果的だと考える。

2. 事業実施により達成できた目標

(1) 事業の成果概要

・青森市：

交流事業の実施により、青森市とタジキスタン双方への関心を高め、ホストタウン交流の取組に対する認知度を向上することが出来た。

タジキスタンの大学生を対象にねぶた祭の映像を用いて説明し、跳人を実演することで、より効果的に、青森市の文化を紹介することが出来た。

食を通じた交流では、青森市、タジキスタンの食材を使ったおむすびを紹介することで、タジキスタンの方々には日本のおむすびの文化を伝え、青森市民には、タジキスタンの食文化を学ぶことで、タジキスタンに対する関心が向上した。

青森市、タジキスタン双方で、手紙交換を通じた大学生の相手国への関心および国際感覚の向上にも寄与した。

・山梨市：

キルギスのパラリンピック選手を招聘した事業では、市民にキルギスの魅力を周知すると共に、パラスポーツを身近なものとして感じてもらうことが出来た。

キルギスの生徒に、山梨市の食材とキルギスの食材を使ったおむすびを作り、食文化を紹介する事業を実施し、山梨市への関心と理解を高めてもらうことが出来た。

山梨市内の小学生とキルギスの生徒を対象にお手紙交換事業を実施した。手紙での交流を通じて、山梨市とキルギス双方への関心が生まれた。

・名古屋市：

ウズベキスタンの首都タシケントの市民を対象としたホストタウンイベントを実施した。イベントでは、名古屋の文化紹介、ハラル対応に留意した食の提供、お手紙交換事業、踊りを通じた文化交流、パラスポーツのボッチャ体験会等を実施し、約 300 名の方に来場いただくことが出来た。

イベントは、相手国のメディアや SNS で発信され、名古屋市の魅力を多くの方に広めることに成功し、名古屋市でもその様子がメディアで放映されることで、名古屋市民のウズベキスタン認知度が向上した。

・権原市：

権原市の独自事業である、東京 2020 大会のカザフスタン選手団のユニフォームデザインに関する覚書を、カザフスタンのオリンピック委員会と締結することが出来た。また、パラリンピック委員会とは、事前合宿に関する覚書の締結を行うことで、東京 2020 大会に向けて相手国との関係を強固にすることが出来た。

お手紙交換事業では、権原市とカザフスタン双方の生徒が積極的に参加して、まだ会った

ことのないお友達に向けて手紙を書くことで、相手国を理解する気持ち、文化を学ぶことで国際感覚を醸成することが出来た。

樺原市民が参加して実施した、樺原市とカザフスタンの食材を使ったおむすびのレシピ開発では、カザフスタンの食文化に触れると共に、おむすびを通じて相手国に対する理解を深めるきっかけとなった。

（2）各調査対象プロジェクトの実施結果に対する評価と今後の課題

・青森市：

今回は、初めての現地交流であり、青森市が企画を行い、在タジキスタン日本大使館をはじめとする関係機関の全面的な協力をいただきながらの交流であったが、とくに、ねぶた師による映像を用いた祭の説明と直接指導によるワークショップや跳人の実演、お手紙交換事業におけるビデオメッセージの交換がより効果的であったと考える。

今後も交流を継続していくためには、双方の市民が主体となる交流へシフトしていくこと、限られた予算の中でいかに持続性のある交流ができるかが課題と考える。

・山梨市：

キルギスを相手国としたホストタウン交流は開始したばかりであり、市民に向けて、継続的にキルギスについて周知していくことが必要であると考える。キルギスの認知度を上げていくため、市内報を活用して本事業の取組内容を周知していく他、今後は、市のHP等も活用して積極的に情報発信を行っていく。

相手国との交流について、習慣、言語等の違いを理解し、これらの差を埋めることが重要である。今回の渡航では、そのために必要な体制や仕組みと一緒に構築していく方々との繋がりを作れた。

大会終了後も持続的な交流を行うため、交流計画の策定、山梨市とキルギスの関係者による体制と、市民が積極的に参加できる仕組みを構築し、交流を継続していくことが課題であると考える。

・名古屋市：

今回の事業を通じて、事業目的であったウズベキスタンと名古屋市において、双方の認知度を上げることは出来たが、事業の継続的な展開に向けた予算確保及び実施主体の育成が課題となる。継続的な交流事業実施のためには、独自の予算や税金を使用しない民間交流への転換が必要となると考える。

実施主体の育成は、民間による自発的な活動を促進するためのフレームづくりが必要であり、今回の交流では、小学校や公益財団法人、民間企業など様々な分野において、初期ネットワークの構築に寄与した。

今後はこのようなネットワークが発展し、市民レベルでの自発的な交流が促進されるよ

う、支援していくことが課題。

・樞原市：

樞原市では、カザフスタン人の国際交流員を通して、カザフスタンとの事業を調整しており、現在はカザフスタン側とも円滑にコミュニケーションが図れているが、言語や商習慣の違いもあるため、国際交流員の任期終了後も、安定した連絡体制を維持することが必要であり、そのための体制づくりが課題となる。

おむすびレシピ制作事業やお手紙交換事業でも、今後も継続できるように市内関係者と連携した体制作り等を検討していく必要がある。

・横断的：

いずれの自治体でも、市民への取組の周知、ホストタウン事業への協力者を増やしていくこと、継続的な交流体制の構築が課題として挙げられている。

継続的な交流事業実施のためには、初期段階では、自治体のサポートのもとネットワークを構築していく必要があるが、将来的には、そのネットワークを活用した民間の方々が主体となる交流への転換が必要となると考える。

3. 相手国への波及効果

(1) 事業の成果概要

・青森市：

ねぶた師による祭の説明やワークショップを実施し、直接祭に関わる機会を設けたことにより、祭をツールとした、青森市の魅力及びホストタウンとしての取組をPRすることができた。また、ワークショップ成果品と祭体験（ハネット）を披露した成果発表の場には、学生を中心に約300名が集まり、タジキスタン伝統の踊りも披露されるなど、効果的な文化交流を行うことができた。

・山梨市：

キルギスの小学生は、おむすびを見るのも握るのも初めてだったため、おむすびをツールとして、山梨市の食文化を紹介することは非常に効果的であった。

お手紙交換事業でも、山梨市の生徒によるお手紙を受け取ったことで、山梨市を身近に感じてくれるキルギスの生徒もあり、この交流を通じて、東京2020大会を越えた関係を構築していく土壌作りができた。

・名古屋市：

名古屋市がウズベキスタンで実施したホストタウンイベント「Tashkent meets Nagoya」では、オリンピック・パラリンピックの関係者や、タシケント市民を対象としたイベントを実施したことでの多くの方に名古屋市を周知することが出来た。交流イベント実施後のアンケートでは、参加者の97%が名古屋市を訪問したいと回答するなど、名古屋市の認知度向上に大きく寄与した。

お手紙交換事業では、名古屋市の子ども達からの手紙を、ウズベキスタンの小学校で掲示し、名古屋市を紹介する「名古屋コーナー」が設置されるなど、今後も継続する交流のきっかけとすることが出来た。

・権原市：

カザフスタンの小学校で、権原市の紹介を行い、権原市の生徒からの手紙を渡すことで、権原市に関心を持ってもらうことが出来た。カザフスタンの生徒の保護者からも、手紙による国際交流の取組について高い評価を得ることができた。

カザフスタンのオリンピック委員会、パラリンピック委員会との覚書締結は、現地メディアでも放映されたため、相手国における権原市の認知度を向上させることが出来た。

（2）各調査対象プロジェクトの実施結果に対する評価と今後の課題

・青森市：

日本の代表的な祭りのひとつであるねぶた祭を、ねぶた師によって紹介し、ねぶたの伝統的な技法を用いたワークショップを実施したことは、非常に大きな成果であると共に、タジキスタン人にとっても、日本の文化を深く知る貴重な機会となった。

材料の問題等もあるが、タジキスタン側でもこの取り組みを継続出来るように、青森市とタジキスタン双方で連携していく必要がある。

・山梨市：

キルギスに無いおむすびや山梨市の小学生によるお手紙交換事業を行うことで、キルギスの生徒に山梨市を知ってもらい、関心を持ってもらうことができた。

今回渡航時の交流を、継続するためには、相手国との協力体制も構築していく必要がある。

・名古屋市：

ウズベキスタンで実施したホストタウンイベントやお手紙交換事業は、ウズベキスタンにおける名古屋のプレゼンス向上に大きく寄与した。

今後は民間の参加者も増やし、民間による自発的な活動を促進するためのフレームづくりの検討も必要であると考える。

・樞原市：

生徒同士の交流を継続することは、カザフスタンと樞原市の継続的な関係を構築するために非常に有益である。

樞原市では、カザフスタン人の国際交流員を通して、カザフスタン側と円滑にコミュニケーションが図れているが、言語や商習慣の違いもあるため、国際交流員の任期終了後も、安定した連絡体制を維持することが必要であり、そのための体制づくりが課題となる。

・横断的：

現地で構築したネットワークを活用して、更なる交流に繋げていくことが求められるが、関係者の異動等により、人的ネットワークは途絶える可能性もあるため、将来の交流を見据えた体制の構築が必要である。

また、名古屋市のように、ウズベキスタンの一般市民を対象としたイベントは、相手国で自治体を周知する上で有効な手段であり、お手紙交換事業も、相手国の生徒に自治体に親しみを覚えてもらう観点では非常に有効な事業である。

4. 2020年東京大会を契機としたレガシー創造への寄与

(1) 事業の成果概要

・青森市：

在タジキスタン日本大使館や、JICAタジキスタン事務所職員と、今後の交流のためのネットワークを構築することが出来た。

・山梨市：

キルギスのパラリンピック委員会、パラ パワーリフティング連盟とMOUを締結し、大会に向けた交流事業を積極的に検討している。

キルギスのパラリンピック選手が山梨市を訪問することで、市民がキルギスとパラスポーツを理解する良い機会となり、共生社会への理解も促進出来た。

・名古屋市：

ウズベキスタンのオリンピック委員会、パラリンピック委員会、外務省、在ウズベキスタン日本大使館とハイレベルな関係を構築することが出来た。

・権原市：

カザフスタンのオリンピック委員会と東京2020大会のユニフォームデザインに関するMOUを締結し、パラリンピック委員会とも事前合宿に関するMOUを締結することが出来た。

MOUの締結を機に、より具体的に事業を進めることができた。

(2) 各調査対象プロジェクトの実施結果に対する評価と今後の課題

全フィールド自治体に共通して、現地への渡航事業により、相手国の主要な機関と関係を構築出来たことが挙げられる。言語や慣習の問題もあるが、継続した関係や体制を構築することが今後の課題と考える。

第4章. 他ホストタウンへの普及・展開に向けた提案

1. 取組内容のモデル化

中央アジアの調査事業では、青森市はタジキスタン、山梨市はキルギス、名古屋市はウズベキスタン、権原市はカザフスタンを相手国として事業を実施した。

各事業では、（1）文化、スポーツ交流、（2）食文化の融合に関する取組、（3）文化交流に関する取組（お手紙交換事業）を実施し、詳細は以下の通りである。

（1）文化、スポーツ交流

・事例1（青森市）：

青森市はタジキスタンでねぶた師によるワークショップや祭りの再現を実施したが、自治体の文化を映像ではなく、実演で伝えることは、自治体の文化を正しく伝えるためには非常に効果的であった。音楽、舞踊、伝統工芸等、様々な分野で検討が可能であり、自治体と相手国がコラボレーションする企画や、相手国で独自の文化として根付くことも将来的には想定される。

・事例2（山梨市）：

山梨市はキルギスのパラリンピアンを山梨市に招聘して市民と交流事業を実施した。自治体住民が相手国の選手と交流する機会を持つことは、東京2020大会への機運醸成、相手国や競技に関する関心を高めるだけではなく、共生社会の実現に向けた地域の課題を確認することにも繋がった。相手国、競技関係なく横連携可能な事業である。

・事例3（名古屋市）：

ウズベキスタンの首都タシケントで、ホストタウンイベントを実施した。イベントに、相手国の選手や市民を招待することで、相手国においてホストタウン、自治体の認知度を高める効果があるだけではなく、相手国選手と市民にとっても東京2020大会への機運を醸成するイベントとすることが出来た。日本で実施するイベントに比べて、準備も非常に大変ではあるが、民間団体も一緒になり実施すれば、効果的な事業であると考える。

・事例4（権原市）：

権原市は、東京2020大会のカザフスタンチームのユニフォームに、権原市とカザフスタンの特色を反映したモチーフを入れることに関して、カザフスタンのオリンピック委員会と覚書を締結した。事業は始まったばかりではあるが、東京2020大会を契機に相手国と一つのものを作り上げる事業は、今後の継続的な交流にも寄与するものであり、他自治体でも横連携可能な事業である。

（2）食文化の融合に関する取組み事例

地域食材と相手国の食文化を取り入れたおむすびレシピの開発は、名古屋市においてはなごやめしの山本屋や名古屋ウズベキスタン友好協会に協力いただき、橿原市においては、現地日本料理店の方に協力いただく等、市民を巻き込んだプロジェクトにつながり、市民の相手国に対する関心が高まった。

相手国との交流事業、自治体での機運醸成に非常に有効なツールであるため、他自治体でも横展開が可能な事業である。

東の食の会主催「せかいむすび」プロジェクトのHPにも掲載することで、取組を広く周知することも出来た。

（3）文化交流に関する取組み事例（お手紙交換事業）

お手紙交換事業においては、青森市は大学生を対象に交流を行い、その他の名古屋市、橿原市、山梨市においては小学生を対象にお手紙交換を実施した。手紙を通じて相手国と繋がることで、地元と相手国の双方の文化や歴史への理解を深め、末永い交流の礎とすることが出来た。

年代に関係なく取組める事業であり、他自治体でも横展開が可能な事業である。

このようにホストタウンの取組みを他ホストタウンに共有することで、課題の共有や互いの取り組みを相互にモデルとして、各ホストタウンが交流事業を拡大することが期待される。特に（2）、（3）の取組み事例は、4つの取組み事例を共有することができたことで、今後、更に発展させた取組みに展開させることが期待される。

また、自治体による事例発表の機会は、発表するホストタウンのPRやモチベーションアップに繋がるという意見や、同じ課題を抱えるホストタウンの参考となり、事例の横展開に繋がるという意見もあり、積極的に行うことが望ましいと考える。

2. 事業実施経費

各事業では、自治体関係者等が精力的に事業を行ったことから、限られた費用の中で多くの事業を実施し、成果を上げることができた。

また、今回の調査対象である中央アジア地域で、今後交流事業を実施する際には、以下に挙げる点について留意する必要があることが今回の事業で確認できた。

<全体に関する留意事項>

- ・渡航スケジュール：

季節が秋以降であったこともあり、日本から中央アジアに渡航する場合には、最低1回の乗り継ぎが必要であった。また、気温は11月には0度近くになる地域も多く、雪による欠航リスクも踏まえて今回はスケジュールを組んだ。11月にトルコ経由でタジキスタンに渡航した際には、濃霧の影響で4時間ほど飛行機が遅延した為、余裕をもってスケジュールを組むことの必要性を感じた。

宿泊日数が伸びることで、費用負担は増えるが、この時期に中央アジア地域に渡航し、現地で交流事業等を行う場合には、丸3日滞在時間を確保した方がよいかと考える。

- ・言語：

ロシア語と現地語両方を話せる通訳の確保が必要。現地で細かい交渉を行う際には、交渉したい分野について明るい人材を確保できるか、事前に確認が必要である。国によって様々だが、最高ランクだと約5万円/日、イベントのお手伝い等は約1万円/日くらいが相場のようである。

- ・借上車：

スケジュールを確実に遂行すること、また安全の確保のため、滞在期間中は借上車の確保が重要事項としてある。料金は、国、乗車人数（車種）によって様々。

- ・宿泊施設：

料金、設備は国によって様々だが、安全が確保できる宿泊施設を利用すること。

- ・ビザの申請：

本事業では、タジキスタン渡航前に在日タジキスタン大使館でビザの申請をした。事前にオンライン申請も必要であり、時間に余裕を持って取得の必要がある。※2020年2月時点では、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギスでは渡航時のビザ申請は不要。

- ・イベント実施時：

現地でイベントを実施する際には、警備の関係で、一定数以上の集会には事前届け出が必要な場合もある。現地の機関等を活用して念入りに情報を集める必要がある。

日本から持っていたPCや音響が使用出来ないことも想定されるため、事前の確認が必要である。

壁に資料を貼る際、画鋲やテープの利用が禁じられているところもあり、ウズベキスタンでは、粘土状のはがせる接着剤が活躍した。

以下は、個別の事業に特化した経費で、今後参考となるものを以下の通り挙げる。

・事例 1（青森市）：

ねぶた師に現地でワークショップをしてもらう場合、その期間中別の業務を請け負えなくなる為、拘束時間、業務負担を勘案して業務を委託する必要があった。特殊技能を有する場合には、一般の謝金とは水準が異なるケースもあるので留意が必要。

・事例 2（山梨市）：

キルギスのパラリンピアンを山梨市に招聘した際は、現地から日本までの移動時間、乗り継ぎ等も考慮して、キルギス人の通訳者に同行してもらった。乗り継ぎ時には、選手に負担のないように空港職員と交渉する等、円滑な交流の一助となった。費用面では、通訳の旅費等が発生した。

・事例 3（名古屋市）：

ウズベキスタンの首都タシケントでイベントを実施した際、イベントスペースに調理場が付いているか、パラスポーツ体験会が出来るかも大きなポイントであり、費用面含め条件に合致するスペースを確保するのに時間を要した。当日の設営も、定刻通りには進まないことも想定されるため、前日から設営できる会場の確保が不可欠である。国、会場によって費用は様々である。

・事例 4（権原市）：

東京 2020 大会のカザフスタンチームのユニフォームに、権原市とカザフスタンの特色を反映したモチーフを入れる為、権原市とカザフスタンのデザイナーには、両地域を訪問し、文化を理解した上で、デザインイメージを制作してもらう必要があった。そのため、相手国への渡航費用、カザフスタンデザイナーの招聘費用（※）が発生した。

（※）新型コロナウイルス感染症の影響により招聘は見送り

3. 事業実施体制・フロー

今回実施した調査対象プロジェクトを実施するにあたり、必要な体制、人数、スキル、手続きについて以下に記載する。

全体に関することでは、事業実施の 2 か月前から関係各所と調整開始することを推奨する。関係者との調整が、予定している期間で終わらない可能性もあるため、余裕をもって進めることが望ましい。

現地で交流事業を実施する際には、現地到着後に当初想定と違うことが発生することも多々あるため、到着翌日の事業実施は避け、現地でも十分に準備が出来るスケジュール、体制を整えるよう留意すること。

各国のイベントにおいて、国旗をモチーフにした装飾品をイベント時に使用したが、中央アジアの国々の国旗の色、模様には、それぞれ意味があり、縮尺、色についても厳格に定められていることが多い為、使用時には留意すること。

・事例 1（青森市）：

タジキスタン側に窓口があることが望ましく、学校やイベント会場の設備、イベント時の映像投影の可否等についても出来る限り把握した方が良い。日本で使える機器が現地では接続不可能なことも有るため、代替手段として印刷物を持参することも検討要。

今回のねぶたワークショップ実施にあたり、日本からはねぶた師を含め 5 名の渡航者、現地では通訳、大使館員を中心に約 3 ~ 5 名の方々のサポートのもと実施した。当日の資料は日本で印刷して持参する等十分な準備は行ったが、会場設営、ワークショップの準備、撤収等で人員が必要となった。

ねぶたの技法を伝授するワークショップでは、ねぶた師が参加者に匠の技を直接見せることが非常に効果的だった。

事業実施の約 2 か月前より準備を開始したが、想定よりも調整に時間を要したため、可能であればもう少し余裕をもって準備を開始する、当初案が実行できない想定で簡略化した第二案も検討することが望ましい。

・事例 2（山梨市）：

キルギスの小学校で文化、おむすび紹介をする事業を実施するにあたり、現地大使館にも協力校の情報、宗教上の制限等を事前に確認した。現地での事業実施に当たっては、現地の協力者の存在が不可欠であると考える。

小学校での事業では、日本からは 4 名の渡航者、現地では通訳、大使館員を中心に約 2 ~ 3 名の方々にサポートいただいた。

日本文化紹介、山梨市とキルギスの文化の融合の証であるおむすびレシピ制作事業については、授業の事前練習を日本でも入念に行い、当日スムーズに実施できるよう準備を行つ

ていた。

キルギスのパラリンピアンを山梨市に招聘する事業では、キルギス渡航時に紹介された団体を通じて調整を行い、コーチ、選手2名、通訳の4名で来日した。往路復路での長時間の移動や乗り換えを考慮して、万全の体制で向かえるため、現地通訳を帯同することにしたが、事業後も積極的に交流サポートを行っていただいている。

山梨市でも、パラリンピアンの受入れにあたっては、有事を想定して、事前に近隣の病院とも打合せ、情報共有を行う等、万全の態勢を整えた。

事業の実施の2ヶ月前より準備を開始できると、好ましい。

・事例3（名古屋市）：

ウズベキスタンで名古屋市のホストタウン交流、文化を発信するイベントを実施するにあたり、日本に留学経験のあるウズベキスタン在住の方々にも多く協力いただき、事前準備、参加呼びかけの情報発信を行った。

渡航前の事前準備では、自治体内で渡航者の打合せを定期的に開催して、イベント準備を行った。渡航後の準備では、日本からの10名の渡航者と現地の協力者による会場の下見や、設営を行ったが、スケジュール通りには進まず、当日の朝は現地ボランティアも含め約20名体制で準備にあたった。イベント内容が、文化、食、パラスポーツと多岐に渡り、会場スペースも大きかった為、当日はボランティアの方々含め多くの通訳の方々に協力いただき、名古屋の魅力を発信した。

現地で和菓子の実演や、ウズベキスタンの食材と日本の食材、技法を使った和菓子を披露したが、ウズベキスタンの方々にとって繊細な和菓子の制作工程を見るのは初めてだったので、日本の文化を発信する良い機会となった。

事業の準備は、実施の2ヶ月前には開始する必要があるが、現地に行って会場を見ないと、何が出来るのか、出来ないのか、どのような工夫が必要か判断できないこともあったため、現地滞在の後半にイベントを実施するようにスケジュールを組むことが望ましい。

・事例4（権原市）

カザフスタンのオリンピック委員会、パラリンピック委員会との調整は、権原市の国際交流員が中心となり進めており、適宜現地日本大使館にもサポートを要請していた。

カザフスタン渡航後に、現地の小学校を訪問し、権原市の小学生とのお手紙交換事業を行ったが、日本からは国際交流員を含む3名の渡航者、大使館員を中心に約2名の方々にサポートいただいた。

権原市の様子をカザフスタンの子ども達に伝え、カザフスタンを紹介する手紙を権原市の生徒に書いてもらうには、事前の準備や当日の円滑な運営は不可欠であり、国際交流員を中心にきめ細やかな対応、準備を行っていた。

お手紙交換事業は、自治体の学校での相手国の説明、お手紙製作の時間も必要になるため、

事業実施の2ヶ月前より準備を開始することが好ましい。

- ・国内報告会、交流事業

2月の報告会は、新型コロナウイルス感染症の蔓延を考慮し中止となつたため、今後はオンラインの交流等、感染症の影響を受けないオンラインの交流を拡充していく必要がある。